



じゅうく。

四万十町営塾「じゅうく。」



## じゅうく開塾、 十周年

町営塾「じゅうく。」は、町内の高校・中学校に通う生徒たちを対象とした町営の塾です。町内高校の約五割、中学校の約三割の生徒が通ってくれています。地域の皆さまに応援いただき、十一月で十周年を迎えました。ありがたいことに「卒業してもじゅうくや四万十町で何かしたい」と、関わりを続けてくれる卒業生の姿もみられています。

「ここで学べてよかった」と心から思える場所をこれからもつづけていきます。

## 「やってみる」 を後押しする

「じゅうく。」は生徒がまだ見ぬ自分に出会うきっかけをつくりたいと考えています。勉強も、それ以外のことも、まずはスタッフや友だちと一緒にやってみる。

教室の中、地域の中での挑戦の先では、さらに外へも目を向けます。昨年に引き続き、探究学習の全国大会「全国高校生マインプロジェクトアワード」への挑戦を今年もサポートします。

「一年目の「じゅうく。」も引き続きよろしく願いいたします。」



町営塾「じゅうく。」

【開室】平日16:30-20:30

塾に関するお問い合わせは、公式LINEまたはお電話にてお気軽にご連絡ください。

町営塾「じゅうく。」  
☎050-5482-3339

人材育成推進センター  
☎0880-22-3163



四万十町営塾「じゅうく。」  
LINEアカウント



四万十町営塾「じゅうく。」  
Instagramアカウント

このコーナーでは、県立窪川高校、県立四万十高校、町営塾「じゅうく。」での生徒たちの活動を月替わりで紹介しています。

山崎規久夫さん  
(伊勢エビ漁師)

## 待ちかねちゅう人がある

志和の名物といえば伊勢エビ。漁は10月から12月にかけて最盛期を迎える。漁港に並ぶブルーシートの小間で、オレンジ色の建網が揺れている。「時間があったら修繕せないかん。こればあしんどい仕事はない」。山崎規久夫さんが網に手に苦笑いする。

建網漁は、水深15～30メートルの海底にカーテン状の網を張り、夜行性の伊勢エビが引っかかるのを待ち、早朝に水揚げする。一回の漁で網のあちこちが破れてしまうため、その都度、新しい網糸で補修しなければならない。長さ数百メートルに及ぶ建網を、延々と繕う作業が続く。「大変やけど、エビがようけかかったら、そらうれしいわね」。

志和で生まれ育った山崎さん。父は当時あった大敷組合の漁師だった。子どもの頃は、山の上に掲げられた青い旗が集落に大漁を知らせた。「浜にブリがどっさり揚がりよった」と懐かしむ。

かつてはブリや伊勢エビのほか、モジャコ(ブリの稚魚)を育てて出荷する漁師もいたという。山崎さんが漁港に目

をやる。「この両側に船がずらっと並んじよった。いろんな漁師がおって、仕事がありよったさね」。30代までは窪川などで働き、41歳で本格的に志和の漁師になった。最初は海士として素潜りでサザエを採り、生計を立てた。

海の異変は「20年前ごろやろうか」。海水温が上がり、生い茂っていた海藻がほとんど姿を消した。サザエもいなくなり、山崎さんは伊勢エビ漁へ転じた。

始めた頃は20人ほどいた伊勢エビ漁師も今は6人に。一大イベントの「志和ふるさとまつり」では、漁師たちが網を出し合って伊勢エビを構える。「毎年待ちかねちゅう人がある。そういう人のためにも漁は続けていきたい」。漁期外の春から夏にかけては、仲間と「志和藻場を守る会」としても活動。藻を食べるムラサキウニを駆除し、間伐材で稚エビの成育場所を整えるなどの取り組みを続けている。

時代とともに海は変わった。それでも、古里を思う志和の漁師たちの姿は、変わらずここにある。



町にはこんな waza も

タイピングが得意! 久原 陸さん 十和小学校4年

先生の勧めで2年生からタイピングの練習を始め、めきめきと上達。高知県教育委員会が開催する「高知家タイピング選手権」(小学校中学年の部)では10位に入賞した。「スコアが上がっていくのがうれしい」。さらに上位を目指してキーボードに向かう。

ちょい  
waza!!

こだわりの「技」できらりと光る四万十町の人々を紹介します。  
ちょいwaza!!は随時募集中!▶

